くりまの
まつりのはじまり

日本の昔話・沖縄民話の会 文・渡辺皓司 絵

沖縄民話の会

昭和51年、祖国復帰後に始っていた組織的調査活動を基に沖縄民話の会が誕生。現在会員数約百五十名、県内各地に支部を持ち、既に一万五千話に及ぶ収集成果がある。又毎年の合宿研修会、合同調査、研究発表等の他、絵本、民話集の作成にも幅広く取り組んでいる。
連絡先＝宣野湾市沖縄国際大学遠藤研究室内

渡辺皓司

1932年群馬県生。東京芸大卒。日本美術会会員。油絵を中心に創作活動を続け、個展十数回、日本アンデパンダン展に毎年出品、1969年、復帰前の沖縄を旅して〝おきなわ〟にとりつかれて以来、取材を続け沖縄の人々とその姿を通して〝おきなわのこころ〟を追い求めている。
現住所＝東京都世田谷区桜上水５－２－19

世界のメルヘン絵本（全30巻）

❶ヘンゼルとグレーテル　植田敏郎・安井淡・絵訳
❷長ぐつをはいたねこ　榊原晃三・村上勉・絵訳
☆❸三まいのふだこ ほか一編　辺見じゅん・石倉欣二・絵文
❹おおきなかぶら ほか一編　宮川やすえ・かみやしんえ・絵訳
❺三びきのこぶた ほか一編　鈴木佐知子・小野かおる・絵訳
❻マッチうりの少女　山室静・渡辺藤一・絵訳
❼かさこじぞう ほか二編　稲田俊和・梅田作子・絵文
❽あかずきん　矢川澄子・純子デイビス・絵訳
★❾やんちゃウサギ　木島始・山内ふじ江・絵訳
★❿トム・チット・トット ほか一編　吉田新一・鈴木康司・絵訳
⓫三びきのくま　鈴木佐知子・岩村和朗・絵訳
★☆⓬りゅうのおくりもの ほか一編　土屋北彦・いわおひでき・絵文
⓭ブレーメンのまちのがくたい ほか一編　中村浩三・赤星亮衛・絵訳
☆⓮ゾウをいれるつぼ　山内良・山木始・絵訳
★☆⓯ふしぎなバイオリン　小沢清吉子・山木亮・絵訳
⓰しっかりもののすずのへいたい　山室静・中谷千代子・絵訳
★☆⓱サンドリヨン　そやすこ・三好碩也・絵訳
☆⓲きつねとおおかみ ほか一編　田中かな一・長野博・絵訳
★☆⓳たからのふね　井上洋介・井島久子・絵訳
☆⓴ねずみのたたかい　亀井俊介・エム・ナマエ・絵訳
★㉑いばらひめ　篠原勝之・矢川澄子・絵訳
★㉒ジャックと豆の木　菊池貞雄・乾侑美・絵訳
★㉓ゆきむすめ　土方重巳・田中かな子・絵訳
★㉔みるなのざしき　宮本忠夫・大島広志・絵文
★㉕おやゆびこぞう　こさかしげる・小沢俊夫・絵訳
㉖こんびたろう　水野憲治・野添憲雄・絵文
㉗ハーメルンのふえふき　赤坂三好・早乙女忠・絵訳
㉘くりまのまつりのはじまり　渡辺皓司・沖縄民話の会・絵文
㉙はだかの王さま　佐野洋子・山室静・絵訳
㉚たけむすめ　丸木俊・君島久子・絵訳

●既刊好評発売中
☆印＝日本図書館協会選定図書　★印＝全国学校図書館協議会選定図書

世界のメルヘン絵本・28　くりまのまつりのはじまり

昭和55年９月20日初版第１刷発行　　定価 780円

文・沖縄民話の会　絵・渡辺皓司　　デザイン協力・舟橋菊男

発行人・相賀徹夫　　発行所・株式会社　小学館　　東京都千代田区一ツ橋２－３－１

電話　編集・東京03-230-5535(代)制作・東京03-230-5333(代)販売・東京03-230-5739(代)　振替　東京8-200番

印刷所・共同印刷株式会社

©1980　小学館　Printed in Japan

★製本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。
★本書の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となります。予め小社あて許諾を求めて下さい。
ＮＤＣ 908 68Ｐ 25×20 cm

世界のメルヘン絵本

くりまの
まつりのはじまり

日本の昔話・沖縄民話の会 文・渡辺皓司 絵

小学館

むかし、宮古島の　川満というところに、きさま按司という強いかしらが、すんでいた。

按司は、わかいころから、毎年、おおぜいの手下をつれ、大きな船で　海をこえては、遠くの国まで　出かけていった。

そして、そのたびに、りっぱな　大和のかたなや、唐のにしき、南の国の　めずらしいたからものなどを　船いっぱい　つんで、川満のみなとに帰ってくる、いさましい男だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この　きさま按司には、長いこと、子どもが　なかった。
ようやく、船たびをやめるほどの　年になってから、
女の子が、ひとり　生まれた。やがて、その子は、
大和は　もちろん、広い唐の国でさえも　見たこともない、
花のように　美しいむすめに　そだった。
按司は、神さまや　ばけものに　とられたりしないように、
むすめが　どこに出かけるときも、母親をつけてやった。

きさま按司の城は、
川満のみなとや、遠くの島じまが
見わたせる、おかの上にあった。
石がきでかこまれた　城の庭には、
家の大きさほどもある　大きな岩が、
ひとつ　あった。

ある朝、むすめが、ひとりで
岩の近くに　立っていると、
東の海に　のぼったばかりの
赤い太陽が、ゆらりと　ゆれ、
矢のような光を　するすると
のばして、むすめを
つかまえてしまった。
すると、むすめのおなかは、
その日から　大きくなり、
三年もの間　大きいままだった。

ちょうど　三年たって、子どもが生まれそうだ、というので、あわててよういをし、まっていたが、三日たっても、七日たっても、生まれない。十三日めになって、やっと　むすめが生んだのは、なんと、大きな三つのたまごだった。

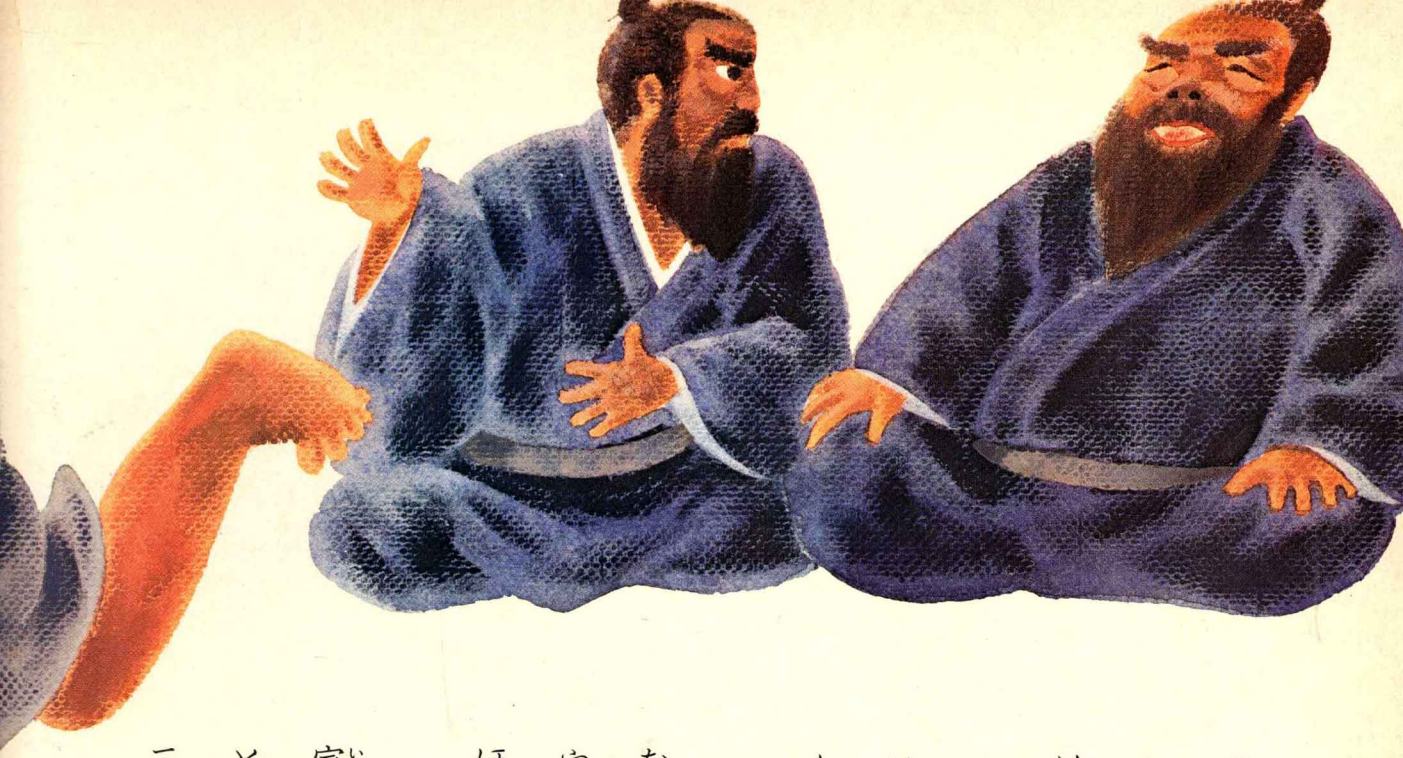
「ふしぎなことだ。ばけもののたまごかもしれん。いったい、なにが出てくるか、見てやろう。」

と、きさま按司は、三つのたまごを　かれ草の中にうめておいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

きさま按司は、それからというもの、毎日、
たまごをうめた　はたけに　行ってみた。
ひと月たっても、ふた月たっても、たまごは　そのままだった。
ちょうど　三月たった日に　行ってみると、かれ草の中から、
「おじい、おじい。」
と、よぶ声が　聞こえた。按司は、
「だれが　よぶのかな。」
と、おもって、声のする　かれ草の中をのぞいてみると、
たまごのからをかぶった　三人の男の子が、すわっていた。
按司は　よろこんで、三人の子どもをつれて、城に帰ってきた。
「おい、大きな男の子を、三人も　さずかってきたぞ。」

「とにかく、なにか　食わせてみよう。」
と、めしをたいてやると、三男は
三じょう、次男は　五しょう、長男は
七しょうも、ぺろりと　食べてしまった。
　三人の子どもは、食うたびに　大きく
そだった。そのかわり、いちどに
なん十人分も　めしを食われるので、
さすがの　按司も、
「これでは、わしらの食うものまで
なくなってしまう。」
と、すっかり　こまってしまった。
　そこで　按司は、三人の子どもを、
与那覇の勢頭豊見親という　一族の
かしらに　くれてやることにした。



きさま按司が、三人兄弟を　与那覇まで
つれていくと、子どもがない　勢頭豊見親は、
「よし、くれるなら　わしが　そだてよう。」
と、たいへん　よろこんだ。
「そうか、そんなら　たのんだぞ。」
と、按司は、三人とも　豊見親に
くれてしまった。
　ところが、遠い国ぐにまで　その名の
なりひびく　豊見親も、ひと月ほど
やしなっているうちに、三人の　大食いには、
ほとほと　あきれてしまった。
「こんな子どもを　そだてていたら、おれの
家まで　食いつぶされてしまう。」
と、とうとう　きさま按司のところに
三人兄弟を　かえしにきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com